



第8巻第6号
通巻第90号

サウス・アフリカ

西南西に進路を取れ

独逸は終わった。
中田よ、去るなら去れ。
僕たちは南アフリカに向かう。

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

性善か性悪か、という問いは、二千数百年に渡って、時折、人々の心を悩ませている。そのどちらでもなく、人というものは本来は無色なものである、とする考え方もあるし、そう思っている人が多いのではないかと、とも思う。少なくとも、私はその口。生まれてきた時には善も悪もなく、単なる動物。そもそも善だの悪だのって概念は動物にはないではないか、と。動物から人間になっていく過程で、獲得されていく概念、感覚なのであるからして、と思うのである。いや、思っていた、というべきか。何しろ、近頃の世界を眺めていると、逆もしやないが、無色から始まっているのだとは考えにくい。それほど悪が蔓延している。

歩行者用の信号機があります。大通りを渡るうとする時なんざ、事故を避けるために大いに役立つている……場合もある。しかしながら、どうしてこんなとこに信号があるんだよ、と思わず知らず咳かすにはいられないような所にあることだってある。人も車も馬もベンギンも、殆ど何も通らないような場所。そこになぜか作られている信号機。信号機つてやつはね、お上との癒着ビジネスの重要な一貫でね、などという、悪い人たちの悪い動機によって、無理矢理作られたのかもしれない。そんなことを思わなくもないけれど、今はそんな話ではない。
無用な……あるいは、無用に思えて仕方がない

今日の紙面から

- 二面(hola) ある体験へ
- (からすライブラリー) CD『イン・チエルカ・ディ・チーボ』
- 三画(四街道レポート)
- ピン、ボン、じゃパン

三十円+三十円値上げ

……信号機の、しかも、赤に遭遇した場合、人はどうするだろうか。単車や自動車を運転している人の多くは、ちよいむかつきながら大人しく青に変わるのを待たせよう。反則金などがあるからね、ということもあるだろうけれど、信号が赤なら止まるべし、という常識は運転者の間には意外に徹底されていて、赤無視で通り過ぎるのを見かけることはあまりない。少なくとも、うちの近所では滅多にない。

ところが、あなたが歩行者だったらどうか、と尋ねるまでもなく、人も車も殆どいないような交差点では、信号が赤であろうとも、左右をさざざつと見回し、ささざつと渡ってしまう人の如何に多いことか。さて、これは悪か否か。理屈上は、悪であると言わざるを得ない。法律を犯しているのだから。しかし、法の隙間を縫うっての、極めてあくどい金儲けに執心している人々が裁かれずこのうのと過している現実もあるわけで、それを思い浮かべるならば、下々の感覚としては、誰一人おらぬ交差点での赤信号無視、しかも、徒歩であれば、助弁してあげてくれたかええやないですか、と偽詫りで申し上げたくもなる。嘘も方便でも言いたいような。

ところが、「誰一人おらぬ」という前提が外れると事態は微妙になってくることもある。私なんざ、基本は正義と標榜しているの、非常に急いでいるのでもない限り、徒歩時の無人の赤信号でもちんまりと待っているのが常である。問題はそこに誰かが

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

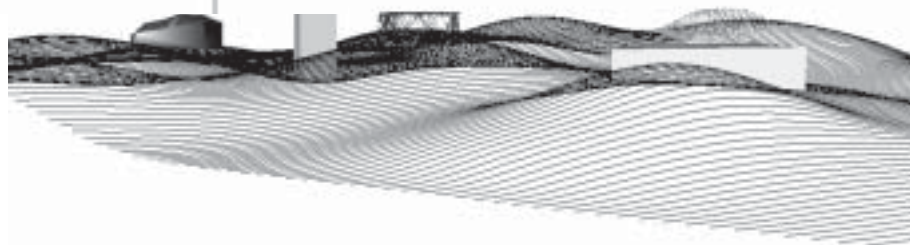


ある体験へ

地形の生成ルールがあります。地形に模型がおかれます。人びとは、探検するように、気に入った場所を探します。

均整のとれた美しさより、空間の動きを感じられること。プリミティブで、生きいきした楽しさを感じられること。

でもあえて問おう。美しさはやはり存在するではないか。



CDs

In cerca di cibo

Gianluigi Trovesi/Gianni Coscia
ECM Records、2000年、ECM1703



ECMはきわめて誠実に思えるレーベルである。マンフレッド・アイヒヤーの美意識が行き渡っており、音楽そのものが私の趣味とは合わないということはあるにせよ、手に取ったどのアルバムもECMがECM作品として胸を張って世に送り出しているのだなあ、という印象を持っていた。中学生や高校生だった頃の話。あれから二十年、三十年を経た今も、その印象は揺るがない。時代に沿いながらもぶれがない。これはなかなか凄いことだ。

ここで繰り広げられるのはクラリネットとアコーディオンのイタリア人デュオ。ECMの名に恥じぬ透明度の高さ。美しい。ジャケッットも相変わらずで、音のない音楽とでも呼びたくなる。二人が紡ぎ出す音楽は、モダンでありながら、しばらくぶりだねと肩を叩きたくなるような懐かしさに包まれ、ほんわりとした暖かさが胸の中に広がる。窓を開けて外の空気をゆっくりと吸い込んでみたくなるような。もっとも、東京の空気じゃいけませんかね。

(全太)

ピン、ポン、じゃパン

今回は盲腸にも、扁桃腺炎にもならず、無事日本に帰国。帰ってからしばらくはバタバタして、あれよと言つ間に時が過ぎてしまった。そんな中、お母さんと電車で墓参りに行ってきた。久しぶりに目にするつり革広告が、物珍しくて面白く、それらを端から一つずつ眺めながら、電車が揺られている時に初めて、日本に帰ってきたんだなあ」と言つ実感湧いた。僕にとつて一番日本を感じさせられるものは、食べ物でもなく電車と駅だったというのは自分で予想していなかった。駅に行つて切符を買い、ホームの自動販売機でジュースを買い、人込みに紛れて電車が揺られる。そんな行為、目にする物の一つ一つが、忘れていた感覚を思い出させてくれたような気がする。

そして東京。人に会う用事があつたので新宿に行つたら驚いてしまった。「やばい！」心の中で思わずそう叫ぶ。新宿の都会っぷりにびっくり。もともと知らない場所ではないはずなのに、服屋でも飯屋でも、飲み屋でも、電気屋でも何でもあつて、人がいっぱいいて、車が沢山走つていて、色んな音がして、と言つのに圧倒されてしまった。しかし飲食店だけでいい何軒あるのだからか。その雑踏が、何だか迷子になつてしまふようで少し恐かつた。だいたいどうして深夜2時のファミレスに、何処をどう見たつてシルバースhirtなお年寄り達4人組がたむろしているんだ?? 恐るべし新宿。やっぱり東京は怖い。

こうやつて、ちょっととした異邦人感覚で自分の国を見ているのは、なかなか面白い。それにして日本機械は良く喋ることに気が付いた。

た。機械ではなくても、とにかく音が多い。大抵のボタン類は押すと音がする。音の出ない自動販売機を見つける方が難しい気がする。駅のホームでは必ずアナウンスがあり、電車が発車する時にベルが鳴り、次の駅を音声で知らせられる。バスに乗つても同じ。車がバックする時には喋るし、トイレには水の音が出るボタンがある。自動ドアがいらつしやいませ、ありがとうございますと言つたら、家では、お湯の温度を変えればちいこい音声で画面の内容を繰り返して教えてくれるし、はたまた冷蔵庫、カーナビだって喋る。確かに親切で、音が出る事によつてボタンがきちんと押された事が確認出来たり、安全面や、目の見えない人への考慮があるのはもちろんだけれど、ちょっとつるさい。

くんだり、マナーが悪かったりでうるさいと言つ理屈は多いに分かるんだけど、何か少しおかしいような気もする。どことなくそれは自分の読んでる本には必ずブックカバーをつけて、何を呼んでいるのか分からなくするのに似ている。

僕は、日本人はどういう奴らだ?と聞かれた時には、細かくてちょっと極端な所がある」と答える。それは、カミカゼだったりオタク文化だったりテクノロジーだったり良いことにも悪いことにも良く表れているような気がする。そして時にはこつけいにさえ見えてしまつその極端さが、好きであったり嫌いであったりするのだ。きつと、電車の中と駅には、僕にとつてのそんなものが沢山あつたに違いない。そしてそんな事を見つける度に、やっぱり自分は日本人なんだなあと思つのである。

(神山)

+ 30 - Smoke + 30

大多数の読者には無関係だろう、この6月1日、東京の銭湯料金が30円上がって430円になった。このところの原油価格高騰に耐えきれず、というのが表向きの理由ながら、慢性的に利益の薄い商売であるには違いなく、私自身はずっと前から値上げやむなしと思っていた。無くなるよりは、である。

おまけに全面禁煙にもなった。これはひとつ風呂上がりにベンチでフルモンティで寝そべっての一服を楽しみにしていたパチンコさんには大打撃。よぼよぼで歩くのもままならないパチンコさん、手持ちがばたでなんかかわいそうである。さらに追い撃ちは、7月からのアナザー30円、煙草も値上がる。

銭湯、煙草、パブルもデフレもなんのその、特に銭湯は地道に値段を上げ、利用者を減らしてきた。私が東京に出てきた1982(昭和57)年4月の時点で、銭湯は220円、煙草は180円だった。在京ひと月で風呂代は早速上がった。以下、値上げ年表である。

	銭湯	煙草
82年	230	
83年	240	200
84年	250	
85年	260	
86年		220
87年	270	
88年	280	
89年	295	
90年	310	
91年	320	
92年	330	
93年	340	
94年	350	
95年	360	
96年	370	
97年	385	230
98年		250
99年		
00年	400	
01		
02		
03年		270
04		
05		
06年	430	300

この6年、銭湯はよく頑張つたと、私は褒めてあげたいのである。無論、バタバタと廃業が止らず(杉並区内だけで00~06年の間に57件から47件) その客を吸収してきた結果、今のところ生き残っているに過ぎないのだけれど。

(望月)

(一面から続く)

通りすがってしまった場合、私の隣に並んでこちらをちらちら窺いながら、しかたなしに、という風情で一緒に信号を待つ人もある。あるいは、こちらに「警をくれながらも、阿呆か、という素振りですんずんと赤信号を渡っていく人もいる。そんな場合も、私は文句を言うことはない。何しろ、この無人の赤信号機との戯れは私にとっては善悪というよりは一つの趣味みたいなものである。余所様にあれこれ押し付けたくはない。だが、しかし、随分昔のこと。ジョン・ロットンがロックンロールは死んだなどと嘯き、私のようなパンクにかぶれた小僧っ子がそんな発言に少なからず影響を受けていたという頃合いの話、無人の赤信号待ちをしているところ、低学年の男の子が登場したことがある。彼はどつしたかという、私の横にちよこなんと立って一緒に静かに信号が変わるのを待ったのであった。趣味で信号待ちをしているのだから、他人様のことはどつてもいいことではあるけれど、少し嬉しかった。実際問題、彼は「規則を守る」とい



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

bar&kitchen kanna
 営業時間
 平日・土曜日 11:30~15:00 / 17:30~25:00
 日曜日 17:30~25:00
 定休日
 毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

中野区新井1-30-6
 第1三宮ビル1F
 Tel : 03-5343-1316

bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事もできるShotBarです。ビール、パーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。

木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。

編集後記
 からす新聞第八巻六号(通巻第九十号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇六年七月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

3771

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
 03-3379-1451

宝仙寺
 ファミマ
おうめかいどう
 中野坂上駅

3771

うことを学んでいる時期であろうし、まだまだ経験の少ない小さな子にとってみれば信号機というものには安全へのささやかな導き手でもあるわけだから。そう思っているところに、くたびれたグレーのスーツのおっさんが来合わせた。せかせかと。男はちらりと私たち二人に視線を送ると、非常に幽かに舌打ちをして信号を無視して道を渡り始めたのである。私はどうしたか。

こら、おっさん、何はしよるんじゃ、ぼけが、的なことをやや声高に申し上げたので御座います。すると、先方は、ためえ、文句あんのか、的なことを御返答下さったのです。それで私は、子供が見ているところ、何、赤信号渡り腐つとるんじゃ、的なことを猶もご注意申し上げたのです。すると、件のリーのマン殿は渡りかけた道をこちらに戻っていらつしやつたので、行き掛かり上、私も数歩進み出て、先様の胸の真ん中、ネクタイの辺りを掴ませて頂いたので。すると、先方もそれに呼応するよう、私のシャツの胸の辺りを握り返して来られました。結果的に、横断歩道の真ん中近くで、お互いの胸倉を掴み合い、間近で唾を飛ばし合うような意見

交換つまり、何と言つのか、おらおらおらおらの状態となつたので御座ります。

その時のこと、私の目の端に、件の低学年児童が脅えた顔で後退りする姿が映つたのである。直後、彼は走り去つた。私は呆然として、何やってんだろうな、俺ってば、という心境に陥り、おっさんに向かつて、もうええわ、この阿呆たれが、的な暴言を吐いた上、おらおらを解除し、とほとほと交差点を離れ、手近にあった喫茶店に入り、素っ気ないウェイトレスのおねえさんにアイス・コーヒーを注文し、インヴェイダー・ゲームなどして、気を紛らそうとしたのであります。ううむ。

あれは、七十八年の夏の始まりの頃だっただろう。あれから、三十年近くが経つたけれど、今でも時々、私は誰もいない赤信号を待ちながら、あの日のことを思い出すのである。そして、たまに、人てえものは性善か性悪か、なんてこと悩んでみるのであります。ははははは。

(全文)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
 Facsimile : +81-3-3220-0640;
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
 篠崎健一アトリエ